

# 社会でたくましく生きる個が育つ

## ～地域のひととの出会いを力に変える子どもを育てる～

矢出 大介

総合的な学習の時間（以下文中は、総合とする）の学習は、ひととの出会いを楽しみ、地域との主体的なかかわりをもとうとする子どもを育てることが大切だと考えた。そこで、自分たちに身近な地域とのかかわりの中でよさを実感し、地域との主体的なかかわりをもとうとする子ども、和歌山（地域）を大切にすることを育てたいと考えた。子どもたちは総合の学習を通して、地域を大切にすることの素晴らしさを実感していった。本実践でも、ひととの出会いを大切に、子どもから生まれたハテナや発見から課題をみんなで追究していった。地域に住むこだわりをもった大人に出会うことで、自分もそのようになりたいと考えて、課題に対して学習を進めたことにより、多面的に追究することができた。

キーワード：捕鯨 有機野菜 ひとの出会い 体験的な学び 自己の生き方

### 1. 社会でたくましく生きる個

社会でたくましく生きる個を育てるには、子どものころに多くの体験的な学びをし、様々な職種の魅力的なひとに出会い、感動して学ぶことが重要である。このような複合的な学びは、長期的な記憶として子どもの記憶に残り、これからの自己の生き方をより良い方向に導くと考える。体験的な学びや出会いの後、表現活動を組み入れて振り返り、そこで感じ、考えたことを全体学習体験や出会いをただの体験で終わらせるのではなく、経験へと高めるための実践を研究していく。

#### 1. 1. 地域教材の魅力

子どもたちが生活している地域を教材にすることは、子どもたちの知りたい・もっと学びたいという追究する意識を高めてくれる。また、子どもたちが自分たちの住む地域の様子に関心をもち、そこに暮らしこだわりをもって働く人々と直接的なかかわりをもつ中で、学び、自らの思いや願いを表現していく。そして、課題を追究し続ける主体的な活動が、地域について真剣に考え大切に思う心につながっていくと考える。こうした地域教材の魅力を以下の3点で捉えた。

- 1 子どもたちにとって身近であり、親近感をもち、その中で生活することのよさを感じることができる。それにより地域を大切にすることが高まり、地域の発展を願う気持ちを培うことができる。
- 2 直接体験を伴った見学や調査をすることが容易であり、様々な魅力的な人々と出会い、活きた資料や情報を収集するなど、インターネットや本だけでなく多様性をもって地域教材を活用することができる。

- 3 自分の生活にとって切実感があり、体験を生かして考えて判断することができる。

これら3点が、地域教材の魅力であり、これらの条件を満たす学習を1年間の学習の柱として計画した。

この学習を通して、地域に住む多くの魅力的な大ひとに出会わせることで、子どもたちは、課題に対して深く追求したり、多面的に考えることができた。

#### 1. 2. 魅力あるひととの出会い

何が起こるか分からない社会でたくましく生きる子どもに育っていくためには、魅力あるひとに出会うことが重要な要素である。魅力あるひとに出会うことで、「自分もこうなりたい。」「自分ももっとがんばりたい。」「大人になったこんなことをしてみたい。」など、社会に出ていくことに希望をもつことができると考える。そして、出会いをより効果的にするには、指導者になってもらえるようなひととの最初の出会いが、とても重要だと考える。教師が「このひとと会いましょう。」と子どもに言うのではなく、何か問題が起こったり、子どもたちだけでは解決が難しい壁にぶち当たったりした時が、魅力的なひとと出会うチャンスになる。疑問や問題を解決するためには、どうすればいいのかを投げかけ、子どもたちの中から、「このひとに聞きたい。」「このようなひとに聞きたい。」と声が上がってきから、そのひとに出会わせることで、自分たちが望んで来てもらったひとなので、学ぶ意欲が高まる。

また、いきなり出会うのではなく、事前にみんなでのようなひと（年齢・性別・性格・見た目など）かを話し合ったり、想像して絵に描くことで、会うことが待ち遠しくなる。そして、出会った時の、印象も強く心に残る。初対面の状況でも、子どもたちなりに何

か思いをもって接することができる。ひととの出会いを楽しみにし、その出会いをきっかけに視野・価値観を広げ、自己の生き方を変えることもできると考える。そして、その魅力的なひとが地域にいたることがきっかけになって、地域を大切にしたい気持ちも高まる。

### 1. 2. 1. 有機野菜農家Fさんとの出会い

1学期は有機栽培にこだわり、JASの有機野菜の認定を受けている農家のFさんに、自分たちの畑を見てもらい、質問をしたりアドバイスをもらったりした。また、Fさんの畑を見学し、みんなに安心して食べてほしいことや、未来ある子どもたちのために美しい自然を残していきたいという思いなどを聞くことができた。

子どもたちは、自分たちなりに愛情とこだわりをもって育ててきたつもりであったが、Fさんとの出会い、畑を見たり話を聞く中で、「もっとこだわりたい。」「もっと愛情をもって育てたい。」「Fさんのように育てたい。」と思うことができた。

### 1. 2. 2. 捕鯨漁師さんとの出会い

2学期は捕鯨の学習において、捕鯨漁師さんや鯨を大切にしている太地町民のひとたちに出会った。鯨を生活のためだけに捕るのではなく、鯨を供養するなど感謝の気持ちをもっているひとたちの話を聞くことができた。太地町に校外学習に行った時には、10名以上のひとがお出迎えをしてくれ、鯨の刺身を振舞って頂き、子どもたちの質問に答えるために鯨の各分野の専門の方が来てくれていた。鯨を学びたいと考えている自分たちのために熱い思いで接してくれるひとに出会うことができた。この出会いから、子どもたちは長年鯨とともに生きてきた伝統が太地町民の絆をより深くしていることを肌で感じる事ができた。伝統を大切にしたいひとたちの出会いを通して、絆の大切さも学ぶことができた。

### 1. 2. 3. 指導者となってくれる地域のひと

地域の魅力あるひとは直接出会うことにより、学びを深めてくれる素晴らしい指導者になってくれる。そのことが、子どもたちにとって、学ぶための大きなエネルギーになる。素敵な出会いが、人々の願いやこだわりを知るきっかけとなり、その思いに応えたい、近づきたいと子どもの追究する気持ちが高まり、学び合うことができる。心を動かされる出会いは子どもの記憶に長期的に残り、その子の生き方にも影響を与えてくれる。

### 1. 3. 地域のつながりの強さ 太地町の捕鯨

子どもたちが地域のつながりの大切さを実感できる教材として、5年生が春に行く南紀旅行で出会った太

地町を取り上げた。太地町の捕鯨の学習をするにあたって、出会わせ方として太地町長さんや太地町の捕鯨漁師さんなど多くの町民の方々が「5年C組」が捕鯨の学習をすることに対して心から喜び、町を上げて「5年C組」の学習に協力していきたいという熱い思いを伝えてもらった。単元の終末に、捕鯨で学んだことを集会発表と番組作成をし、それをDVDにまとめて太地町に送った。この5年C組の学習成果を太地町の多くの方々が喜んでくれ、太地町では捕鯨を知ってもらうためのプログラムを考えようかという動きにまでなっている。子どもたちの捕鯨に対する熱い思いが太地町を動かしたのである。

集会発表や番組作成をすることによって、相手意識をもつだけでなく、自分たちの思いは直接伝わり、自分たちががんばれば地域のために何かできるのではないかという期待をもってこれからの学習を進めるきっかけになると考えた。

子どもたちは、世界の多くの国から抗議活動を受けている漁師さんとの出会い、その中でなぜここまでして続けていくのか疑問を感じていった。漁師さんの捕鯨に対する思いと町民の鯨に対する思いに寄り添いながら調べ学習を進めていくことで、「太地町だからこそ捕鯨を続けていられるのだ。」と感じるようになった。それは、ある子が、「漁師さんが捕鯨を続けていられるのは、長い間鯨を捕り続けている伝統があり、町のひとにとっても鯨は欠かすことのできないものになっている。」と言ったことに続いて、「鯨は太地のひとたちにとって誇りであり、みんなで大切にしているもの、つまり鯨で町がつながっている。」と発言したことで気付くことができた。色々と考えが出てきたが、子どもたちは、鯨を通して太地町のひとたちがつながり、自分たちの町やそこに住むひとたちも大切にできているんだと考えるようになった。自分たちも太地町の人たちのようになりたいと感じた子も多かった。

## 2. 学び方の研究

### 2. 1. 学び方を学ぶ

5年生の総合では、学んでいく対象を作業的・体験的な学習や問題解決学習を通して、感じたことを中心にできるだけ具体的な「もの・こと」を大切にしたい。学び方を身につけるような学習の工夫を考えた。また、子どもの考えが多面的になり、より深く追究できるように「ひと」との出会いを重要と考えた。「学び方を学ぶ」ために、発表、調べ方など、5年生の発達段階に沿った指導をしていった。発表においては、他者意識を大切に、他人に自分の考えを分かりやすく伝えることを第一にすることを徹底した。そのために調べてきた資料や自分の思いを整理させた。調べ方においては、インターネットや本だけに頼るのではなく、自分の

目で見たり、実際にひとから話を聞くなど自分の足で稼ぐことを第一とした。それにより、調べたことから何かを感じて自分の考えをもつことの大切さを伝えた。

子どもたちは、野菜作りをしていく中で、水をしっかりあげていても大きく育たない時には、本やインターネットで調べるだけでなく、実際に知り合いの農家のひとに聞いたり、畑を見るなど、足で稼ぐ調べ学習の大切さを実感した。そして調べたことに基づいて実践することで、成功体験をすることもできた。これにより子どもは感動して学ぶことができ、長期的な記憶として残ることになると考えた。また、その実践を友だちに伝えることでお互いの喜びを共有する素敵さも実感することができた。

## 2. 2. ひとり学習と全体学習の充実

総合において、「子どもが学びをデザインする」ためには、ひとり学習と全体学習が相互に関連しながら、さらに深めていくことが重要だと考える。ひとり学習を進めていく上で、子ども一人一人をしっかりと見とり、評価することが大切になってくる。そして、その評価や見とりに基づいて、その個をどのように育てたらいいのかという明確な視点をもって、個に応じた指導をすることができる。それにより、主体的にひとり学習をするための支援をしていくことが重要である。個をしっかりと理解することで、個が育っていく。全体学習において、調べ学習を通して蓄積してきた自分の考えを発信することで、考えを明確にすることができる。そして、友だちと話し合いを進める中で、自分の考えを見直したり、深化させたり、発展させたりしながら、お互いの共通点や相違点を探ることができる。これにより、クラスみんなで課題を共有することができる。つまり、ひとり学習を充実することで、全体学習で自分の考えを修正したり、深化させたり、発展させたりすることができることを実感させる。それにより、ひとり学習の必然性が明確になり、意欲的に調べ学習ができると考えている。また、自ら意欲的に課題を追究し、自分で新たな問題を発見し、問題解決の過程で友だちと学び合うこと自分を見つめ直し、自己の生き方をよりよいものになるようにつなげていける。

## 2. 3 様々な職業のひととの出会い

上記でも示したように子どもにとって魅力あるひととの出会いは、今後の生活に大きな影響を及ぼしてくれる。子どもたちは、自分の親以外の職業についてあまり知らないことが多い。社会の教科書に農家や漁師の仕事ののっけていても、教科書やインターネットを活用することで知識を得ることはできるが、どのような思いをもって仕事をしているのか想像するのが難しい。つまり、学んだことが実際の生活に活かすことが困難になる。すべての学びにおいて、実際に働いているひ

とに出会わせることはできないかもしれないが、子どもの生き方や考え方を大きく変えられる可能性のあるひととの出会わせたいと考えて単元を構成した。今回は、年間を通して第一次産業に携わるひとたちとの出会いを中心にして年間計画を立てた。1学期は有機栽培にこだわりをもって農家をしているFさん、2学期は町の伝統とそこに住むひとたちの絆を大切に捕鯨漁師を続けるKさん、3学期は林業の技術を継承していくことを大切にしているTさんと出会わせた。

それぞれ違う職業のため、異なる考えのようだが、すべてのひとに共通していることがある。それは、お金儲けのためだけでなく、未来ある子どもたちのために働いていること、自分の仕事に誇りをもっていることであった。多くの子どもは、このひとたちとの出会うことで、他者のために生きることの素晴らしさを学んだ。また、仕事に対する考えの幅も広げることができた。全員が、自分の将来の夢(仕事)を書くことができるようになった。



(図1 収穫を喜ぶ子どもたち)

## 2. 4. 体験学習のよさ

体験的な学びの良さは、五感を使って複合的に学ぶことができることだと考える。これにより、子どもたちは心を動かして学びに向かうことができ、その一つ一つの学びが長期的な記憶として残る。今回の実践においても、どのようにすれば子どもが感動して学んでいけるのかを考えて実践していった。

野菜作りでは、学校の敷地内の広い畑を開墾することから始めた。そして、4~5人グループで土地をもって、自分の育てたい野菜を育てた。これにより、それぞれが自分の土地(野菜)に責任をもって育てる。また、自分たちの努力次第で立派な野菜を育てることができるというやりがいももてると考えた。実際に育ててみると、本やインターネットで書いている通りにはなかなかいかない。がんばったつもりでも枯れてしまうグループもあった。それこそが、子どもが学べる機会だと考える。子どもたちは、なぜ枯れたのかを考え、次こそは枯らしたくないと考えて切実感をもって野菜作りに取り組む。野菜農家のひとに聞いたり、立派な野菜を育てている畑を見て研究したりするなど、自ら進んで学んでいく。そして、それを実践する。そ

して、上手く育った時には、同じグループの友だちと喜びを共感し、美味しい野菜を味わうことができた。

(図1)

自分ごととして捉えやすい課題が生まれてくる。子どもたちは無農薬・有機栽培にこだわって育てたので、害虫が大量発生したり、肥料不足によってあまり育たなかったことなど多くの課題に出会うことができた。

### 3. 授業実践 最高5C野菜を育てよう

「なぜFさんは大変なのに有機野菜を育てているのだろうか」という子どもの課題について話し合った。意見交換のが進み、有機野菜とそうでない野菜の長所・短所について比べて話し合っている場面

さき：2つのことについて説明します。化学肥料の長所は、臭いが少ない。調整できる。これは私の家で育てているものなんだけど。この肥料は与えすぎると、肥料やける。有機栽培の短所は、栽培面積を増やすことが難しいことです。

みか：さきちゃんと似ているんだけど。有機栽培は安心・安全。土が汚れない。けれど、虫に食べられたりする。有機野菜を作るひとが少ないから、Fさんは有機野菜を作っていると思います。

ゆき：私は、クラスみんなに質問してみました。有機野菜については、26ひと中17ひとが安心してると答えました。話はわかりますが、私の使ってみたい肥料について紹介します。万田アミノアルファプラス。こんな感じで育つ。こんな感じになるらしいんよ。なぜ、有機肥料じゃないかかという、認定がある。手間がかかるからです。

たく：みかちゃんに付け足しなんだけど。Fさんは有機野菜を知ってもらうために作っていると思います。有機野菜は評判ですよ。多くのひとに食べてもらいたいと思っているから作っていると思います。そして、元々の趣味で作っていたのかなと思います。野菜を育てるのが好きだった。その野菜を食べて、「夫婦でおいしいなあ。」となった。その気持ちを消費者に味わってほしいと思って有機野菜を栽培しているんじゃないかなあ。

### 4. 単元の考察

さきは5C農園では有機肥料を使いと自分の家では化学肥料を使って野菜を育てた。この体験的な学びを基にそれぞれの長所・短所を伝えることができた。それに続いて、みかはFさんの思いに寄り添い、安心・安全だけど作るひとが少ないからこそ有機野菜を育てているFさんの野菜に対する思いを伝えることができた。

体験的な学びとひととの出会いを通して学びを深めていることが感じ取れる場面であった。

その後のゆきの発言は、有機肥料にこだわらずに化学肥料を使って育てたいという意見であった。この子の親戚に肥料や農薬を扱っているひとがいた。そのため、この子は最後まで有機肥料だけでなく科学肥料にも良さがあることにこだわり続けた。そのこだわりが出た場面であった。この場面において、他の子どもがこの意見に対して立ち止まることができなかった。有機野菜にこだわりをもっているFさんの影響が大きく、有機肥料が良いと考えている子どもが多かった。この対立する発言は、学びを深める上でとても貴重であった。子どもがこのような意見に立ち止まれない場合は、教師の出番だったと反省している。ここで対立することで、もっと課題に対しての考えが深まったと考えられる。

ゆきの発言から対立するようにして話しを深めることができなかったが、たくがこのように発言した背景として次のようなことがある。たくは、Fさんの農園見学に行った時に野菜の育て方を注意深く観察したり、Fさんだけでなく、奥さんにも育て方や野菜に対する思いを質問していた。また、たく自身がFさんの野菜を食べてみて美味しかった体験からFさん夫婦の思いを想像して発言していると考えられる。

体験的な学びや地域のひととの出会いを力に変える素地は作られてきているように感じた。

### 5. 成果と課題

「4月からたくさんのひとと出会い、多くの体験をして、和歌山のことをもっと好きになりました。自分の知らないことを知れる楽しさを感じました。自分の仕事に誇りをもって働いているひとってかっこいいと思いました。これからも多くのひとと出会いたいと思いました。」

今まであまり知らなかった仕事をこだわってしているひとたちに出会い、そのひとたちに寄り添っていった子どもたち。自分の目で見て考えることの大切さを実感していた。そして、自分たちの地域の中に誇りをもって仕事をしているひとがいること知り、自分の地域をより好きになることができた。そして、自分たちも地域のために何かしてみたいという認識をもつことができた。子どもたちの書いた作文から、みんなが社会に出ていくことに期待をもつことができていたことが分かった。これからも、地域の未来を大切に考えて自ら考えて行動する心が育つことを期待している。

教師が一人一人の学びに対してどのように支援・評価していくべきなのかをもっと明確にして授業実践をしていきたい。

#### 参考文献

(2010・2011・2012)  
和歌山大学教育学部附属小学校記要  
NO.33・34・35